

力を含めての面接試験の結果、最終的に決定される。したがって主力は大学院生以上ということになる（学部生の割当ては全国で5名程度）。また向こうの大学では語学の準備コースなしに直接勉学生活に入るわけであるから、授業の聴取・筆記能力およびかなりな程度の会話能力が必要とされることは当然であり、より大事なことは、上にも書いたように、留学する必然性についての具体的な計画である。最初に登場したN君の場合は、大阪外語大から本学の社会科学部研究科に入学し、総合科学部の日南田先生の下で「ロシア経済史」を専攻し、その研究のより具体的深化（特に資料収集および現代農村の現地調査）という目的をもっての留学である。なお、この制度には今のところ、残念ながら、音楽、バレエ等の芸術分野は含まれていない。

これに対して、特にソ連・ロシア関係の分

野の研究者をめざすというわけではないが、ソ連の大学で学生生活を送り、ソ連の大学生・若者および一般に人々の生活や考えを知りたい、いろいろ見たり聞いたりしたい、という普通の若者としての興味・好奇心から言えば、プーシキン大学への私費留学は、すっかりしない点はさておき、大いに利用する価値はある（10か月の留学費用はすべて込みで150万～200万程度）。その意味では、夏休みおよび春休みに行なわれるいわゆる語学研修ツアー（3週間程度）に行くのもひとつの方法である（広大生も何人か行った人がいるが、非常によかったとのことである）。以上、留学というテーマで大まかに見てきたが、留学はさておき、広大生もできるだけ機会を見つけてソ連を訪れ、人々の生活・自然に触れてきてほしいと思う。

各国大学事情と日本人留学生の現状

アメリカの大学の授業とカレッジライフ

教育学部 二宮 皓

学期の区分

アメリカの大学は一般に9月から新学年度（秋学期）がスタートするが、大学によっては8月中旬過ぎには早くも始まることもある。春学期の修了時期も大学によって若干異なり、早いところでは5月に、遅いところでは6月に終了する。正規の学年はこれで終了するが、その後、サマースクールと呼称される特別の夏学期が8月にかけて開催される（開設される授業の種類には当然に限界がある）。大学としては施設を年間を通じて有効に使用していることになる。

本学では学期の途中に長い休みがあるが、それと違ってアメリカでは夏には既に学期・

学年が終了しているもので、宿題も期末試験もない。そこで学生は長期の休みを自由に活用できる。この時期に学生はアルバイトなどで学費を稼ぐことになる。大学の授業も夏休みによって中断されない。

入学者の選抜と個性のある学生

大学入学者の決定は、大学進学適正試験（SAT）などの試験の成績、高等学校での調査書の成績及びその他の活動記録、推薦書などの資料によって総合的に入学担当の専門官によって審査・判定される（大学の委員会承認される）。進学適正試験の結果だけで入学者が決定されることはない。たとえばブラ

ウン大学の場合、大学進学適正試験得点（言語テストと数学テストがそれぞれ200～800点となっている）別合格率をみると、言語テストで750点から800点（満点）の得点グループの生徒の合格率は57%（224人受験して127人合格判定）であり、逆に得点が下位の300から399のグループの生徒でも6%（233人受験して14人合格）となっている。数学のテスト得点についてみてもそうである。

このように学力テストだけでは入学者を選抜しないで、多様な観点から学生を評価するのがアメリカの大学である。そこでは当然に個性が重視され、主張のある学生が求められる。結果としてそれぞれの大学には個性のあふれる学生集団が成立することになり、大学にとっても将来多方面で活躍してくれる可能性の高い学生を獲得したことになる。

学生は大学では専門（メジャー・マイナー制を採用するリベラルアーツ型の大学が少なくないが、工学部、教育学部など学部別専門制をとるところもある）を磨くだけでなく、それぞれの個性を磨くことになる。アメリカの大学は学生をこうした目で捉える傾向にある。自己が主張できることはいいことなのだ。

寮から通学

大学に入学するとほとんどの学生が大学のキャンパスにある寮で生活することになる（申込が必要）。2人部屋が一般的であるので、アメリカ人や他の国の学生と生活をともにしながらさまざまなことを学ぶことができる。家族用住居もある。学生は厚い教科書をベルトで束ねて、毎日（週5日）寮から教室や図書館などに通学することになる。授業も昼夜を問わず開かれており、大学院も一緒に履修する授業になると夕方6時から9時までの3時間授業もある。それもアメリカの学生は全員が学生を本務とする「フルタイム」の学生であるわけではなく、本職は別であって大学にはパートタイムの学生として登録して学位の取得をめざす者もいる（学部生の25%、大学

院生の約50%がパートタイムである）。その意味ではアメリカの大学ではその大半が同年齢集団によって編成されるというよりは、30歳代、40歳代といった年齢の高い成人とともに学ぶといった光景がよくみられる。科目によっては高齢者の人も在籍することが少なくない。このことは若者にとっても大変意義があるし、授業の質にとっても大変意味がある。年齢を異にする人々と一緒に学ぶことは特に社会科学や人文科学の分野においてはとてもいいことである。大学の教師としても授業が討議などを通してますます興味深くなり、楽しみとなってくるようである。広島大学でも社会人入学のための特別選抜の制度が開かれつつあるが、この制度が充実すれば一般教育や専門教育の授業がますます豊かになる可能性がある。

時間割からみると授業編成は多用であって、モジュール方式による50分週2回といった編成もあれば、本学と同様な100分あるいは90分授業もある。授業の編成は大学や学部によって異なっている。

授業とアサインメント

授業の最初にオリエンテーションが行われるが、その節に学期中の授業の日程表（進度表）、アサインメントと呼ばれる宿題（文献リストで図書館等で借用して必ず読んでおく物）、テキストの紹介などが行われる。理科系の授業はよく分からないが、文科系の授業であれば、このアサインメントの量はかなり多く、しかもテキストがあれば授業までに読んでおくなど準備する量も少なくない。先生によっては毎回授業の最初にクイズと称して簡単なテストを行う人もいる。中間と学期末テストは必ず行われる。大学院の授業では一般にテストよりはむしろタームパイパー（学期末レポート）の提出が求められる。

初めてアメリカの大学を訪れた人であれば学生の授業中の態度には驚愕するに違いない。本学でも大講義の授業では私語が多い、居眠りしている、時には化粧している、といった

学生についての陰口が聞かれるが、アメリカの大学では授業中にコーラなど清涼飲料水を飲んだり（紙コップの持込みは禁止するところもある）、椅子の上に足を投げたり、抱き合ったり、といった行動がよくみかけられる。その意味で学生の「みかけ」にはびっくりすることになる。

ところが若干遅れて授業が始まるといういわゆる「アカデミッシュ・ツアイト（大学時間）」という大学文化もないし、「休講」という大学文化も存在していない。たとえばイリノイ大学で助教授が担当している教育学の授業があったが、彼がシカゴに出張することになったため、学科の年配の教授が代講（個人的関係のなかで引き受けたようであるが）を勤めていた。しかもその内容は助教授の授業計画に基づくものとなっていた。また大学院の授業ではやはり助教授の担当する授業であったが、彼が風邪で休むことになった日には大学院生で研究助手を勤めている人が急きょピンチヒッターにたった。

教師も授業を休まないが、学生もほとんど授業をサボることはしないようである。学生にとってはサボれば単位が取得できないという現実が待っているし、教師にとっては休講をすることは授業に不熱心であるという授業評価を受けることになり、将来の昇進あるいは再契約その他に不利になるという現実が存在しているという事実は隠されているが。最近わが国で論議されるようになってきているが、学生による正規の授業評価（学科あるいは学部が一定のフォーマットによって学生にそれぞれの授業の内容、スタイル、熱意、その他の側面について5段階評価を行わせる）が行われる。これは森戸道路に立てかけられた授業別単位取得難易度一覧といった学生の授業評価とは少し違っている。

このように授業に出席するための準備と授業を終えた後の復習のためにかなりの時間を費やすことになるし、アサイメントやターム（学期末）ペーパーの必要から図書館での学習が不可欠になる。アメリカの学生は理科系

のみならず文科系でも学期中は勉強で多忙であるということは本当である。

指導についても少し異なっている。大学の先生の研究室のドアには「オフィスアワー」が掲示してあり、その時間にのみ面会できることになっているが、その場合でも学科の秘書などを通じて予約するように求められていたりする（少なくとも文科系の場合）。先生の方から声をかけることはほとんどないので、少しよそよそしい感じがすることになる。でも逆にその時間には間違いなく会えるという良さもある。

カレッジライフ

アルバイトはないことはない（大学でワーク・スタディ・プログラムが提供されることもある）が、少なくとも月曜から金曜までは学生を本務とする生活を送っている。

金曜日の夕方からはキャンパスや下宿街で各種のパーティや催し物が行われ、若者の熱気であふれんばかりとなる。学生会館（ユニオンと称される場合が多い。）のゲーム機コーナー（平日でも多くの学生がゲームに興じているが。）やビリヤードコーナーあるいはボウリング場は学生でいっぱいである。また学生主催のディスコもあれば、ロックミュージックのフェスティバルも開催される。キャンパスでは留学生を囲む会も開かれるし、映画も上映される。アメリカンフットボールやバスケットなどスポーツの試合が数回は行われる（ホームゲーム）ので、それを観戦する楽しみもある。キャンパスの内外にそうした娯楽・レクリエーション施設があるので、ウィークエンドのカレッジライフははとて楽しいし、刺激的でさえあるかもしれない。大学の教職員及びその家族も、時には学生の親も一緒にこうした学生文化を楽しむことが多い。

しかし、それも日曜日の夕方となると図書館で勉強する学生の姿が増してくる。ウィークデイとウィークエンドの明確な区別はアメリカの社会生活の特徴ある文化の一つである

が、カレッジライフでも同じことである。

留学する人への一言

このようにアメリカの大学は楽しさと厳しさが同居し、ある種の「区切り感覚」が強くみられる。そうしたアメリカの生活リズムを感じながら、大いにエンジョイすると同時にしっかりと勉強することになる。

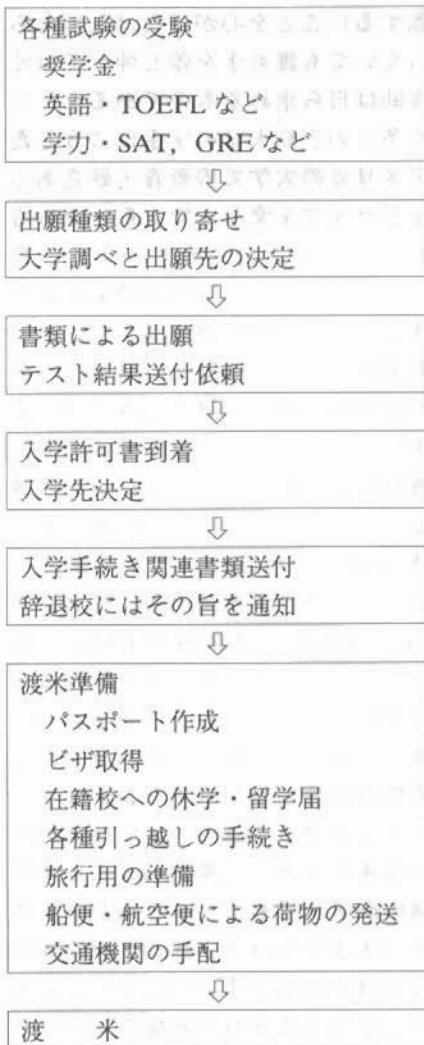
また積極的に求めたり、参加したりすること。英語ができないことはなんのエキスキュースにもならない。授業などで何も発言

しなければ意見がないものとみなされ、授業に貢献していないので当然に成績評価も厳しくなる。そこで積極的に発言する(授業に参加し、貢献する)ことを心がけなければならない。待っていても誰も手を差し伸べてはくれない。援助は自ら求めるものである。

一人でも多くの広島大学の学生にこうした気持ちでアメリカの大学での教育・研究あるいはカレッジライフを楽しんでもらいたいものである。



留学の手順（アメリカの例）



参考図書

- アメリカ留学情報
（武田勝彦監修 ジャパンタイムズ）
- アメリカ大学ガイド
（別冊イングリッシュジャーナル アルク）
- 毎日留学年鑑
（毎日コミュニケーションズ）

留学生センター 田 中 共 子

私費で行く人以外は、奨学金の試験を受けてみる。学力、英語力について受けるべきテストは、大学や専攻によって違う。必要なものを受験しておく。

大学の案内書を取りよせて、プログラムや手続きについて検討する。同時に、海外の研究者や留学体験者に直接話を聞くと良い。東京の日米教育委員会には、各種の資料がある。

出願書類を書いて、小切手による検定料とともに送る。受験したテスト結果は、依頼により直接大学に送付される。

辞退する大学には、通知をしてビザ関連の書類を返却する。

渡米前には、下宿の始末、運転免許証、年金、新聞、電話、雑誌の定期購読などに関する引っ越し時の手続きがたくさんある。また、国際免許証、保険、アダプターなど、旅行と同様の準備も必要。

留学中に行きづまった時

大学のカウンセリングルーム
アガペーハウス（教会のボランティア）